

温、磁場中におけるX線回折、磁化測定によって調べたものである。スパイラル→フェロ転移に伴って結晶構造は六方晶から斜方晶へ転移する。X線回折ではこの結晶構造変化を観測し、スパイラルからフェロへの転移過程を調べた。得られた結果をまとめると以下の通りである。

- ① Dy-4% Yは $T_c=60\text{K}$ でスパイラルからフェロとなる。しかし、スパイラル相も一部低温まで共存する。
- ②低温まで共存しているスパイラル相は磁場印加によってすべてフェロとなり、磁場を取り去っても再びスパイラル相が出現することがなく、準安定状態にあると考えられる。
- ③温度あるいは磁場によって誘起されるフェロ相のスパイラル相と共存する割合は時間依存性を示し、いずれの場合も $\log t$ に比例する。

S D W 相 の 非 線 形 伝 導

北大・理 野 村 一 成

擬一次元有機導体 $(\text{TMTSF})_2\text{ClO}_4$ のクエンチ相スピン密度波 (SDW) 状態において、直流電気伝導度の電場依存性を測定した。低電場ではオームの法則にしたがっているか、電場がしきい値を超えると急激に増大する非線形電気伝導を観測した。この非線形伝導は、 NbSe_3 等の電荷密度波 (CDW) 相での振る舞いに非常に似ており、不純物ピン止めをはずしたSDWの並進運動 (スライディング) による伝導であることが示唆される。しきい電場 E_T の温度変化は、SDWのピン止めの平均場理論により定性的に説明される。

また E_T 以上の直流電場の下で、一定周波数の交流の電圧応答 (狭帯域雑音) を得た。この結果は、不純物ポテンシャル中をスライディングするSDWの周期性を反映しており、スライディングのより直接的な証拠を与えている。さらに狭帯域雑音の周波数より、SDWのピン止めの機構が不純物による2次のピン止めであることが理解される。

「有機伝導体の磁場誘起相転移」

東大・教養 長 田 俊 人

開いた一対のフェルミ面を持つ擬2次元有機伝導体 $(\text{TMTSF})_2\text{ClO}_4$ に於いて2次元面に垂直に強磁場を引加すると、伝導電子は開いたフェルミ面に沿って実空間で1方向に蛇行運動を続け実効的に1次元的な運動自由度を持つようになる。十分低温では磁場中のエネルギー分散の1次元性に起因するパイエルス不安定性が生じ系はスピン密度波 (SDW) 相に2次転移する事が知られている。この場合、系の1次元分散には周期的な蛇行運動の波数 G が逆格子として導入されているため、 $2k_F$ 以外に $2k_F + nG$ (n : 整数) という複数の不安定波数が存在し、SDW相は温度-磁場相図